

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 ISLAM Md Nurul

論 文 題 目

Japan-Bangladesh Cross-Cultural Comparison on Elderly Well-being (高齢者のウェルビーイングに関する日本・バングラデシュの比較研究)

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 高井次郎

名古屋大学心の発達支援研究実践センター教授 松本真理子

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授 清河幸子

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

本論文は、バングラデシュにおける高齢者のウェルビーイングに関する一連の研究によって構成される。特に、日本の高齢者との比較を行い、それぞれの文化におけるウェルビーイングの実態や性質の違いを検討している。

第1章は研究の背景を説明しており、高齢者のウェルビーイングに関する問題の重要性を訴求している。本研究では、栄養や生活水準が高く、医療技術や環境衛生も整っており寿命が長い先進国の日本と、定年退職後の人生が短いバングラデシュを対象に、高齢者のウェルビーイングを比較検討することが目的であった。

第2章は、先行研究が十分ではないバングラデシュの高齢者のウェルビーイングにつながるソーシャルサポートについて、その特徴を明らかにすることを目的とした研究1のまとめであった。本研究は、認知されたソーシャルサポートの男女比較を行い、デモグラフィック特徴によるソーシャルサポートの獲得状況や性質の違いを明らかにし、サポートニーズの充足度とサポート満足度を調べた。

第3章では、バングラデシュの高齢者のストレスと、それに対するコーピングについて検討を行った。生活ストレスの男女比較、コーピング・ストラテジー、生活状況の要因とストレスとの関係などを探り、結果農村居住者、拡大家族同居者、未亡人のストレスが高く、非適応的コーピングのほうが適応的コーピングより用いられがちであることが明らかにされた。

第4章は、バングラデシュと日本の高齢者のウェルビーイングをもたらす要因を、Moos(2002)ストレス・コーピングモデルにもとづいて比較を行った。その結果、Moosのモデルは日本でもバングラデシュでも適合性があることが確認されたが、日本人の場合ストレスとソーシャルサポートはコーピングに負の影響を及ぼしていたが、バングラデシュ人に対しては正の影響があった。また、バングラデシュ人のほうが日本人よりも有意に善霊のウェルビーイングが高く、幸福度がより高いことがわかった。

第5章は全体考察であった。経済発展が著しく、科学技術の先進性により生活が便利かつ効率よく、環境の美しさに衛生状況も優れ、医療技術も世界をリードする日本の高齢者は高い水準のウェルビーイングを得ていると思われたが、本研究の結果からは、世界最貧国の一つである、バングラデシュの高齢者のほうが幸せで、より多くの質の良いソーシャルサポートが得られることがわかった。この結果について議論が展開され、結論としてソーシャルサポートを始めとする対人・社会的資源の供給量が生活水準よりも重要であることを示唆した。

論文審査の結果の要旨

以上、本研究は2つの対照的な文化を比較し、高齢者のウェルビーイングを検討した。この研究の学術的貢献は、以下の点にある。

第一に、バングラデシュの高齢者のウェルビーイングに関する研究が不足している現状に対して、本研究は先駆的な探求を行っている。

第二に、本研究を遂行する経緯において、さまざまなウェルビーイング関連の測定尺度がベンガル語に翻訳され、その信頼性も検討された。このことにより、高齢者に特化することなく、全年齢層を対象とするウェルビーイングを測定するための尺度が準備され、バングラデシュにおける後発の研究に版を準備したことに大きな意義がある。

第三に、高齢者の幸福は物質的な豊かさよりも、対人資源の豊かさのほうがウェルビーイングに起因していることを明らかにし、高齢者の支援の在り方に大いに参考になることである。

第四に、高齢者のウェルビーイングをもたらす要因には日本もバングラデシュは同じであり、その通文化性を明らかにしたことにある。

第五に、ソーシャルサポートを受けることが日本ではネガティブな影響、バングラデシュではポジティブな影響があり、この対照的な結果から、日本ではサポートを受けることは迷惑を家族などにかけるという認識を持っていることが示唆され、日本人特有と思われる対人摩耗や対人負債感に新たな研究側面を提供したことにある。

これらの学術的貢献がある一方で、本論文に対して審査委員からは主に以下の疑問が呈された。

- 1) 本研究で用いられた文化心理学的理論の枠組みが明確ではなく、日本とバングラデシュの比較の重要性の根拠がやや弱かった。
- 2) 本研究で検証するウェルビーイングモデルの選定にあたる根拠が不十分であった。
- 3) 日本とバングラデシュの文化差は、高齢者に限定されるものなのか、それとも全年齢にも同じようなことが確認されるものなのかが定かではない。ほかの年齢層の検討も必要。
- 4) 文化を取り扱っている研究であるにもかかわらず、本研究で意図されている「文化」の明確な概念定義がされていない。
- 5) 研究 1 から 3 までの流れが明確ではない。よりロジカルなつながりが、本研究の整合性を確立するのに必要。

論文審査の結果の要旨

- 6) 幸福はウェルビーイングと同等なのか？ 目的変数がより包括的な概念であることが望まれる
- 7) ウェルビーイングの測定は直近の状態として測定されていたが、より長期的な視野をもって評定されるべき。

これらの指摘に対して、博士学位請求者はよく認識しており、質疑に対する応答も具体的かつ適切なものであった。以上を総合して、本論文は新たな視点と地検を提供するものと認められた。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。